

第71回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

平成29年4月14日

日本建築学会近畿支部

《 短大・高専・専修学校の部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	Revival 阪急神戸三宮駅	森田 康平	修成建設専門学校 建築CGデザイン学科	13
②	“村”のありかた -Next Times- 次の時代へアップデート	山本 美咲	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	33
3	よかわ山田錦のがっこう -兵庫県三木市吉川町の酒米を伝えていくために-	植村 偲	明石工業高等専門学校 建築学科	6
4	さくら美術館 symphonic art plaza	森口未知子	修成建設専門学校 建築学科	11
5	甦生 人・森・建築	柯 正雄	中央工学校OSAKA 建築学科	3
6	LOOP CONNECT	森下 真樹	大阪工業技術専門学校 インテリアデザイン学科	8
⑦	^{よすが} 縁の学び舎	阪根 歩実	明石工業高等専門学校 建築学科	6
⑧	1/1429 アール・イマキュレ・アーティストの為の創作と展示空間への提案	竹内 千速	京都建築大学校 建築専攻科	6
9	まちのあり方 ~泉北ニュータウンの郊外都市への提案~	植野 友紀	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	34
10	美術公園	中東 由季	京都建築専門学校 建築科二部	7
11	高野のみち	牧田 桃香	修成建設専門学校 空間デザイン学科	2

(受付順) 以上11点<No. 欄に○印のものは入選作品>

《 工業高校建築科の部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
①	Connect share space	今本 大樹	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4
2	ホテル	加藤 徹大	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	13
3	LIVING OF THE ALL LIFE ~全ての生物の住処~	陸野 基	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	5

(受付順) 以上3点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部

平成28年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校
卒業設計コンクール（第71回）審査報告

審査員長 堀口 徹

平成29年4月14日（金） 審査会場・大阪科学技術センター（6階605号室）

審査員長（互選） 堀口 徹
審査員 大影 佳史・末包 伸吾・竹口健太郎・中村 潔・濱田 徹・
林田 大作 (50音順)
応募作品 短大・高専・専修学校の部11点、
工業高校の部3点 (別紙参照)

審査経過

審査に先立ち、本コンクールの主旨と内規、続いて前年度の実績および本年度の応募状況を確認した。

当日は審査員7名のうち2名が欠席。参加した5名の審査委員から互選により審査委員長を選定したのち、昨年度の審査方法を確認しながら、本年度の審査方法について協議を行った。

本年度は短大・高専・専修学校の部は応募作品が11作品と昨年度より若干減ったものの、入選上限の3作品をめどに入選作品を選ぶ方針とした。一方、工業高校の部については、応募作品が3作品と入選上限に満たないほど少なかったこともあり、入選作品を出すかどうかも含めて議論することとした。

まずは各審査員が各自で全作品を閲覧した上で、短大・高専・専修学校の部については各自3作品、工業高校の部については入選作品見送りも選択肢として、あらかじめ数を限定せずに入選候補作品を推薦することとした。なお、欠席した審査員のうち事前審査をしていた1名の選定作品数は、上記に述べた本審査委員会の方針に沿うものと判断できたため、その結果を後半の議論の集計に加算することとした。

投票の結果、短大・高専・専修学校の部ではNo.7とNo.8が過半数を超える票を集めた。まずはこの両作品の入選妥当性について審議を行なった。詳しい講評は各選評に譲るが、両作品ともにテーマ設定、リサーチ、設計された建築物、プレゼンテーションなど一定のレベルに到達していることを確認し入選作品とした。残る1作品をめぐり得票数が入ったNo.2、No.3、No.6、No.9、No.10を対象に議論を行った。各審査員が自ら投票したものに対してコメントを発表した上で、議論を行った。

No.2は、A3フォーマットのリサーチブックの体裁である。地方都市の郊外住宅地に対するまちづくりの仕組みや断片的なアイデアが豊富に提示されている点は評価されたが、まちの将来像を統合するビジョンが描かれていない点が物足りない。No.9も似た系統だが、No.2ほど提案の独自性が感じられず、また建築的な提案にも到達していなかった。

No.3は、人口減や生業の後継者不足に悩まされる地方に新たな人の流れを生み出すとともに、生業継承、定住促進など地域経済への視野を持つ点は評価されたが、提案さ

れた建築物の魅力と説得力が不足していた。

No. 5 は、放棄森林の再生と木材資源の有効活用というテーマ設定、建築的な造形力は目を引いたが、テーマへの理解に深みがなく、耳障りの良いキーワードを散りばめた印象が拭いきれない。より大きな自然／産業的なサイクルなどテーマの本質に迫って欲しかった。

No. 10 は、均質なラーメン構造による躯体、連鎖するアーチや部分的な逆スラブの挿入、不統一な階段の分散配置など、均質性と多様性という近代建築以降の普遍的な問いを深読みさせたものの、最終的に構築された空間が他案を圧倒する魅力や狂気さの獲得に至っていない。

審査会では、未来の生活空間のプロジェクションには多様な課題と方法論があることを反映し、卒業設計においても多様なテーマとアプローチを許容すべきとの合意のもと、No. 7、No. 8 とは異なるアプローチで、かつ一定の説得力と提案力のあるものとして、地域リサーチというアプローチを代表する No. 2 を 3 つ目の入選作品として選定した。

工業高校の部については、そもそも入選作品を選定するかどうかも含めた議論を行わざるを得なかった。これは入選作品の少なさもさることながら、応募された作品の内容によるところも大きい。過半数を集めた No. 1 は、家族を超えた新たな集住の場を提案するもので、テーマ設定は時代を捉えたものだが、敷地選定や、個人空間と共有空間への問いかけが不十分であることは指摘された。過半数に満たなかった No. 3 については、タイトルが 20 世紀型の建築観に対する批評性を予感させるものだったが、テーマとして掲げていた「全ての生き物」への扱いが、所詮人間中心主義的に動植物を装飾的に扱う方向を強化するもので、テーマと表現に大きな矛盾がある点や、倫理的な価値観も鑑み入選は見送られた。

(堀口)

審査概評

今回の応募数は短大・高専・専修学校の部が 11 作品、工業高校の部が 3 作品であり、ここ 3 年ほどのそれぞれ 14～19 作品、5～8 作品の状況から減少した。特に工業高校については、学校そのものの統廃合や教育方針の変更等が背景にあるやに聞くが、急激な応募数の減少には危機感を感じる。

応募作品の傾向として、少子高齢化に伴う空家問題や小中一貫教育、木材を使用したサステナブルな取り組み等、現在の社会的課題を取り込んで建築的な解決をめざそうとした作品が目立った。一方で実務的に完成度の高い図面作品や、まちづくり・都市計画的アプローチの卒論形式のものもあった。そうした作品とは別に、土地の持つ歴史や伝統を生かしていく計画や、ユニークなテーマ設定と場所性・環境の読み込みの秀逸な計画についても議論された。

ただ、コンセプトとその展開、最終の造形ともに優れた提案がなされ、バランスのとれた作品は少なく、その中でも、他の作品に比べて問題意識を含め総合的な完成度の高い 4 作品が選ばれた。これから建築界に船出しようとする若い人たちのために、こうしたコンクールへの参加が来年度以降、増えていくことを願っている。

(濱田)

A 3判 33 枚のプロポーザルである。冒頭で「地域サポートコミュニティ作り」というテーマが示され、計画対象地において今なお残る“村”のような関係性の衰退と再構築という着眼点、建築を学んだからこそ提案できることは何かという問題提起がなされる。サーベイでは、対象地の概要とともに、各地区の生活環境におけるヒト・コト・モノの関係性が示され、各地区固有の時間と空間、場所性が浮かび上がる。提案では、手書きのイラストレーションを交えながら、それらの関係性をつないでいくことで、各地区の具体的な生活行為を提案している。まとめでは、本提案が“村”をアップデートし、そのことが“村”のサステナビリティにつながると主張している。

サーベイに大部分の労力が割かれ、設計提案が幾分散漫であり、簡単なイラストレーションに終わっている印象は否めないが、広域のエリアを対象とし、ヒト・コト・モノの関係性をつなぐことによってまちに居場所を生み出そうとする「コミュニティデザインの姿勢」を今回は積極的に評価した。本作品に込められた制作者の熱意に敬意を表するとともに、今後、この問題意識をアップデートする努力に期待する。

(林田)

よすが

縁の学び舎

阪根 歩実君 (明石工業高等専門学校)

小中一貫、施設一体の義務教育学校の設計提案である。学校教育、義務教育学校に関する社会的背景や課題をしっかりと踏まえており、自らが経験してきたであろう学校教育の場についてリアリティを持って素直に真面目に取り組まれたことが伺える。提案については、初等-中等-高等として 4-3-2 制を導入し、3つの学年段階それぞれに学級担任制、教科担任制、教科センター方式をあてた3つの教室群が提案されており、教室間の関係、教室間をつなぐ中間的領域の考え方等、それぞれ成長段階に応じた場所づくりがなされている。また、それらの教室群間あるいは教室間の中間的領域に、大きな役割、意味を与え、個の時間、異学年の交流を大切にした空間提案がなされている。各所できめ細かな構想がなされており、コンセプトから建築計画、空間設計にいたる全体の構築力、またそれらの表現力においても、完成度が高く作者の力量が感じられる。一方、隙のないまとめ方は、大人しく、もう少し成長していく子どもならではの視点やアイデアも見たかったという感想や、ランドスケープ的な視点からの、全体計画や、屋外環境のデザイン、さらには敷地内外の関係等も、まだ検討の余地が多くあるのではといった感想等もあった。作者の今後のさらなる成長と活躍に大いに期待するものである。

(大影)

竹内 千速君（京都建築大学校）

“アールイマキュレ”：無垢な芸術の意、ダウン症の人たちが作り出す芸術のことである。その名付け親のアーティスト夫妻が作ろうとしているダウン症の人たちの創作活動の場“ダウズタウン”。この作品はその“ダウズタウン”を具現化するひとつの建築的提案である。作者はダウン症の人たちのためのアトリエを実際に訪れ、その活動をよく観察し創作過程も作品の一部として表現し、また“アトリエまでの道”としてサイトの枠を超えて町への提案を行うなど、時間的、空間的なひろがりをもって作品をより魅力的なものにしている。

“アールイマキュレ”の作品の特徴について、中沢新一は目を大きな主題として描く“アールブリュット”の作品と対照的に「色で面を構成する表現がベース」であり「色彩で面を形成するとき・・・色彩そのものがやわらかく広がって行って、空間が確立されてしまわない状態、いわば“前空間”ともいべきものになっている・・・」と述べている。環境との関係について、周囲に立ちはだかる壁に穴をうがち、その穴を通して築くのではなく、色彩によって単純な三次元ではない空間の在り方を示す“アールイマキュレ”の特徴、そこから窺われるダウン症の人たちの外部空間に対する認識に素直に対応するようなおおらかな空間が表現された優れた提案である。

（中村）

[Connect share space](#)

今本 大樹君（大阪市立工芸高等学校）

既存の典型的な集合住宅に対する批判的視点をベースに、各住戸を独立させ、2層横並びにずらしながら配置することによって、全体計画に変化を持たせ、住民同士のつながりを生み出そうとした提案である。各住戸の窓は、互いに視線が合わないように配慮されている。住戸間には、路地やポケットパーク、デッキなどが設えられ、これらをコモンスペースとして利用することによって、住民同士が顔を合わせ、集まって住まうことの意味を実感できるよう配慮されている。1～3人用住戸に加え、共有室と共有の浴場・リビングが用意されている。このことにより、「縦長の箱が連なる町風景の問題」と「深刻化する空き家問題」を解決しようとしている。

地域コミュニティの変容、画一的な入居者像の崩壊、シェア空間のあり方などに直結する同時代的なテーマ設定、住戸キューブの空間操作によって半屋外的な居場所や風景の連なりを作り出す努力などを今回は評価した。

（林田）